

横坂源インタビュー

——2014年「午後のうるおいコンサート」に続いてのご登場、ありがとうございます。今回のプログラムの冒頭には、J.S. バッハ《ヴィオラ・ダ・ガンバ・ソナタ》が置かれていますが、振り返ると2014年もJ.S. バッハのコラールから始まっています。横坂さんにとって、J.S. バッハという作曲家は特別な存在なのでしょうか。

Y 最近よくJ.S. バッハのコラールから演奏会を始めることが多いです。自分でもよくわからないのですが、やはり日常の生活空間とホールというのは少し時差があって、それをバッハが埋めてくれるというか。色のパレットの幅が広いので、空間に浸透していった際に、自然と次の曲へ移行していきやすいという感覚があります。

なので、コラールの後には、そのまま拍手なしで次の作品を演奏することをよくしています。それも、この2年ぐらいのことでしょうか。

——それは、ご自分が演奏会に集中するためのものなのか、あるいはお客さんとのつながりを持つためのものなのでしょうか。

Y 両方あると思います。日常生活では、音ってすごく大きいですよ。例えば、東京では駅のホームに立っているといろいろな音がするように、あまり静かな時間がない。コラールという日常とは全く異質なものをポンとぶつけることで、次の作品へと自然に流れていくイメージがどこかにあります。

——静かなものを求めていくところが、横坂さんの演奏スタイルに通じるものがありますね。前回お招きした時は、演奏をお聴きしていると深い森に分け入っていくようなイメージを抱きました。

Y 自分自身もそのようなイメージをしながら演奏していることが多くあります。もちろん曲によっても変わりますが、自然と音楽とは直結しているので、関連する情景がたくさん浮かんできます。ブラームスやヤナーチェク、ベートーヴェンもそうですが、ドイツものを弾いている時は、森からのインスピレーションを多く受けます。特に今回弾いたバッハでは、教会の肌寒い感じや石の感じなどのイメージを持っています。また、骨のにおい、ザラザラした感じ、教会の空間の高さや広さ、静けさなども感じます。

——絵画や視覚的なものをイメージしながら演奏することが多いのでしょうか。

Y 幼少時からそうでした。演奏をしていると絵が出てきたり、そうではなくとも色が出てきたり、何となく自分の中でストーリーがあることが昔はよくあって、今もその名残があると思います。また、マットなのかブリリアントなのかなど同じ色でも違いますね。そういういったことが作曲家によって、あるいは同じ作品の中でもこの部分は違うということが常にあります。もしかすると、そのようなところが森につながってくるのかもしれませんが。

——今回は《ヴィオラ・ダ・ガンバ・ソナタ》（以下、《ガンバ・ソナタ》）を探り上げましたが、バッハのチ

エロの大作ということでは《無伴奏チェロ組曲》も考えられますね。あえて《ガンバ・ソナタ》を選んだ理由を教えてください。

Y それはもう、藤井先生の存在に尽きます。先生に初めてお会いしたのは大学の室内楽の授業を受けた時で、レッスンをして頂きました。藤井先生は絶対に覚えていないと思いますが（笑）。その後は自分も留学をしたりと間が空きましたが、5、6年前に演奏会をする機会があり、そこでまた久しぶりにお会いして、先生の音の質感や芸術感に憧れを抱きました。それから3年ぐらい前にNHKのラジオ番組出演の話を受け、それではぜひにと先生にお声掛けしたら快諾して下さい、その時に《ガンバ・ソナタ第1番》の第3楽章と第4楽章、フランス音楽の小品を演奏しました。その時は、新しい見たこともないような景色を《ガンバ・ソナタ》から得られて、いつか先生と全曲を共演して勉強させて頂きたいと思いがりました。

そのような中、ワーナーミュージック・ジャパンさんから今回のCDリリースのお話を頂いたので、自分では絶対にこの作品を演奏したい、とすぐに思いました。もちろん実現したいけれど、藤井先生が（自分との共演やガンバ・ソナタの録音を）引き受けて下さるかはわからない。でも、もし藤井先生にお許しをいただけるのであれば、先生と《ガンバ・ソナタ》を録音したい、と強く思いました。

バッハは、奏法のことも含め、多くのアプローチが可能な作曲家だと思います。ですので、CDを出すことは本当に怖く、苦勞もするだろうなと思ったのですが、それよりも藤井先生への尊敬と自分の好奇心が勝ってしまいました（笑）。

——お話にあったように、いろんなアーティストがバッハ作品の録音をしています。横坂さんが初めてのCDリリースにバッハを選んだと伺った時には、新たな境地へ進むための挑戦なのかなとも思いましたが、いかがでしょうか。

Y そうですね。いろいろと考えが巡りましたが、今の自分がやりたい事あるいは勉強したい事が、バッハであり《ガンバ・ソナタ》だったのだと思います。自分が学ぶにはこれ以上ない機会でしたし、それをやらずにどうするの？という気持ちでした。

しかし、いざリリースに向けていろんな事が決まってくると追い詰められていく怖さがありました。本当に怖くて、録音する前の1か月ぐらいはイライラしたりもしました。

——横坂さんの「今」とバッハがピタッと合ったのかもしれないね。

Y そうかもしれません。終わってみると、本当に得難い、自分がこれからチェロを演奏していくにあたって財産になる経験ができたので、録音させて頂き、感謝しています。

——ヴィオラ・ダ・ガンバについて、少し教えてください。この楽器は、いわゆる古楽器で弦も6本あるなど横坂さんがお使いのモダン楽器とは異なりますが、モダン楽器で演奏するにあたって異なる点はありますか。

Y 実際にヴィオラ・ダ・ガンバを演奏したことはないのですが、当時の楽器は張力がとても弱いので、繊細で乾いた音が出ていたのではないかと想像しています。それを双方モダン楽器で演奏しますので、倍音の伸びなどの違いがあっても良いと思いますし、古楽器のアプローチを無理に取り入れるのではなくて、自分の楽器でできる良いところを探して表現できれば良いなと思います。ですので、今回の録音も含めてですが、

そんなに意識はしていません。

——《ガンバ・ソナタ》を演奏するにあたり、スコア上で、モダン楽器と異なるところは？

Y モダン楽器だと簡単に横へ平行移動できるのですが、弦の数が多いいオラ・ダ・ガンバのために作られた作品なので、音をとるためには（指の）ポジションを飛ばなければいけないところにリスクがあります。そのことを技術的に埋めるために、できるだけ幅は広くとりながらもあまりにも時間がかかりすぎないように、ひとつの音楽の流れのなかで演奏できるように意識しました。

——先程、藤井さんのお話がありましたが、横坂さんが共演者に求めることはどのようなことですか？

Y ……（沈黙）。何でしょうね（笑）。自分とタイプが近い人にもシンパシーを感じますし、離れている人でも良い科学反応が起こることもあるので、とても難しいですね。基本的には、いわゆる伴奏ではなくて一緒に音楽を創造する人であり、お互いに近い地図を持っているということだと思います。その地図があれば、テンポ感だったり、音が出るタイミングやフレーズの方向性が異なる場合にも、お互いに聴き合い、大きな音楽を創造していくことができます。つまり、地図があるから両者が同じ場所に辿り着ける。このような感覚を分かち合うことができる方と演奏している時というのは、本当に楽しいです。

——今回、藤井さんと共演されると伺った際には、それは絶対に演奏会になるなと思ったのですが、先程お話し頂いた視点からですと、共演者としての藤井一興さんはどのような存在ですか？

Y 芸術とは何であるかと知っている芸術家です。それは、きっと藤井先生の音を聴いていただければ誰もがわかるはずです。ファンタジー、知性、感性の全てをはみ出だしてしまうくらい持ち合わせている方です。また、それがホールの中に音の粒子としてふわっと広がる様子が目で見えるのではないかと思うような感覚に陥りますし、ただ感性だけで演奏しているのではなくて、藤井先生の中には、最初から終わりの音まで紡がれる自然な流れがどの作曲家の作品にも確実に存在し、自由なのに必然的な流れが同居している二つの相反する音を放出し続けている。それは、真の芸術家ではないと出せない音なのです。

——藤井さんと CD を録音した際の様子をお聞かせ下さい。

Y リハーサルはしましたが、音楽について言葉では多くの事をお話することは無かったように思います。フレーズの方向性やダイナミックについても同様です。また、リハーサルというより、毎回コンサートに臨むような緊張感と小さなことにとらわれない解放される感覚があり、幸せな時間でした。

——先程、地図という例えがありましたけど、お互いに同じ地図を描いていたということですか？

Y そうでありたいですね（笑）。一度通すと、本当にそれが共演者の意図的な音なのか、そうではないかが先生にはわかってしまうのではないかと思います。とても楽しみで、ですので、リハーサルが楽しみなのに、すぐ緊張してしまって約束の時間の 40 分も前に着いてしまったりもしました（笑）。

——今回のプログラムの意図や聴きどころをお聞かせ下さい。

Y 《ガンバ・ソナタ》を弾いている時に、なぜだかベートーヴェンを弾きたくなくなってきました。そして、藤井先生はベートーヴェンを演奏されても本当に素晴らしい方ですし、先生ご自身のリサイタルではフランスものを演奏されることが多いので、先生とベートーヴェンを演奏したら、どのような世界が広がるのだろうか？という思いからプログラムに入れました。また、リズムなど各々の国の風土が近いように感じるため、ショパンの前にはドヴォルザークを置きたいと思いました。これは、ベートーヴェンからショパンはすごく唐突的にも思いますので、それを埋めるものは何だろう？と考えていた時にドヴォルザークを思いつきました。ガンバ・ソナタからベートーヴェンはとてもつながるような気がするので、それは割とすぐに決まりました。

——現在の横坂さんが、先に見据えるもの、あるいは目指すものは何ですか？

Y 職人氣質の芸術家に憧れがあり、いつかはその人たちが見た景色を見たいと思っていました。そのためには今の自分が何をすべきかを常に考えているのですが、録音の二日後半あたりにすごく良い瞬間がたくさんあり、藤井先生から芸術とはこういう世界なのだというものをを見せて頂いたように思います。それがまだ強く残っているので、この火が消えないように、自分の音を追求する作業をゆっくりと時間をかけて進めていきたいですね。

また、当時の巨匠がそうであったように、自身の命を削って弾いている人たちは、辿り着くとそれでも笑顔になってしまうような景色があったのだらうと思います。

そのような芸術家に近づくことが自分の大きなテーマであり、これからも精進したいと思っています。

——最後に、相模原のお客様へメッセージをお願いします。

Y 2年半前に演奏した際には、フランス音楽を中心に演奏しました。そして、良い静けさに包まれながらも集中して演奏できたことを覚えています。今回は、CDで録音したバッハの《ガンバ・ソナタ第3番》を冒頭に、ベートーヴェンの《チェロ・ソナタ第1番》という、とてもフレッシュで光の粒子がキラキラ光るような高揚感のある作品が続きます。後半には、今回初めて挑戦するドヴォルザークの小品もあり、最後にショパンの《チェロ・ソナタ》を演奏します。ピアノのための作品を数多く書いたショパンですが、彼が死ぬ間際に作曲したのがこのソナタです。ドラマティックなダンスに強い情感、さらに厳しくグロテスクな部分も多く入っている作品です。作曲家ごとの特色、作品から発せられるメッセージをお届けできれば幸いです。

会場で皆様にお会いできますことを楽しみにしています。